

英語プレゼンテーション—知識から表現へ

松 浦 千佳子

1. はじめに

プレゼンテーションは思考を聴き手が理解できるように表現することである。近年の国際社会では英語が最も有効な言語手段で、本学でも一年次からプレゼンテーションを意識した英語教育を行うようになってきている。

では、表現するとはどういうことか。空腹や不快感を訴える赤ん坊の泣き声など、必ずしも言語を必要としない表現に始まり、複雑な言語を必要とするものまで、多種多様である。言語表現一つをとっても、単に抽象的な思考を伝えるものなのか、あるいはその思考に対して他者の行動変化を要求するものかによって、方法は異なる。それに伴う非言語的要素も多彩だ。たとえば、話の組み立て、ボディランゲージ（表情、身体の動きなど）、声の抑揚などだ。念入りに組み立て方を構築すれば、言語的表現はある程度単純化可能であり、ある目的に対する表現法の正解は一つではない。

学部1年次から、社会人を含む大学院生までにプレゼンテーションを指導して、毎年感じてきたことだが、扱う題材によっては、必ずしも一般的に言われる英語のレベルとプレゼンテーション能力とは一致しない。単純な表現でも効果的に伝えることができる学生がいる一方で、複雑な表現を駆使しても何が言いたいのか明確でない学生もいる。言語表現も内容も優れた、正に「秀」に値する学生というのははっきりしているが、それ以外は、実に曖昧である。英語能力を職業とするのであれば、別だが、本学のように工学が専門で、それを伝えるのに、英語を使わざるを得ないという状況にいる学生の場合、まずは、英語で目的が達成できると言うことを目標にしてもいいのではないだろうか。

ところが、実際、留学生と英語を使ってボランティア活動を行っている学生が、「正しい表現は使えていないかもしれません」と述べたりする。必ずしも英語教師向けに謙遜して述べたわけではないようで、何か正しい表現でなければならぬという思い込みが根強いことの反映ではないだろうか。

本学の学生は、少なくとも中高と英語教育を受け、平均よりは上のレベルで入学してきている。こうした学生が、今まで学んだ知識を利用して、自分が考えたことに自信を持って表現できる手立てはないものかと常日頃考えているのだが、現段階で気づいたことについて本稿でまとめる。

2. 表現とは

プレゼンテーションは、内容の構築、言語表現、そして非言語表現が組み合わさって可能となるので、授業としては扱いにくいというのが正直なところではないだろうか。ある程度、題材を絞って、それに合わせて語彙・表現を教えるということならまだしも、出てくる内容が多種多様なので、テンプレートでは対応しきれない。身体的特徴まで扱うとなると、元の特徴が一定でないだけに大変厄介である。

ただし、学生が将来自分でプレゼンテーションを行う機会があるということ想定すれば、学習者個人がより効果的な方策をとるために、基礎的手掛かり、これをやっていけばとりあえず安心といえるものが何か必要だろう。「この場合にはこうする」というマニュアル的なやり方は、手軽で学習者も好むところのものだが、プレゼンテーションは、個々の特性を持った個人が聞き手に対して行うという点で、単純なマニュアルにおさめきれものではない。単純化されたマニュアルを修正するための前提として、学習者が客観的に自分の特徴を把握する必要がある。

例えば、プレゼンテーションの教科書には、まとまりをつなぐ表現集、プレゼンテーション特有の言い回しなどを扱った者が多いが、実際にはこれらの表現は、しっかり組み立てられた構造を補うもので、構造自体を練ることと共に習得、あるいは、構造が複雑になったところで適宜入れていくというやり方もできる。ということは、まず話すべき題材を選択し、それに合わせて内容を練っていくという作業が重要になる。この場合、学習者の思考パターン、話せるものは何かという気づきが重要になる。まずこれを思考パターンのアウェアネスと呼ぼう。

次に、題材を伝える内容が効果的に練られていても、それが、言語音として聞き手に伝えられているかという問題がある。人間が声を発する際には骨振動が伴うので、本人が認識している声が必ずしもそのまま表出されているわけで

はない。これは、耳の良し悪しではなく、調音器官と呼吸器の「未熟な使用」、または「勘違い使用」のためだ。いわゆる音痴はこの極端な例だが、言語音でも、特に、母国語とかけ離れた特徴を持つ外国語の場合、自分が思っているように音が出ていないことは多い。自分の調音器官・共鳴体・呼吸器官の動きが客観的に把握できていなければ、どんな努力も徒労に終わる。こうした発話に関わる諸々の動きに気づくことを身体的アウェアネスとしよう。

最後に、自分が話す対象がどれだけの人数で、どれだけの距離にいて、話をする空間はどうなっているかということによって、内容の組み方、声の出し方を調整する必要がある。これを空間のアウェアネスと考えよう。

以上3つのアウェアネスによって、自分の話が客観的にとらえられ、向上するための手掛かりとなるのではないだろうか。以下では、これら3つのアウェアネスについて詳しく述べる。

3. 思考パターンのアウェアネス

何かを伝える場合には、内容をよく練り、何をどのような順番で伝えるかという作業は不可欠である。テンプレートとして、サンプルを提示し、それに合わせて内容を組み立てていくというやり方もあるが、学習者の伝えようと思うこと、伝えられることは多種多様で、それらすべてを補うことは物理的に不可能である。

テンプレートはプレゼンテーションの形から指導するものだが、目的を明確にして、そのために必要なことを学習者に考えさせるという手段も考えられる。この場合、テンプレートは便利だが妨げになる場合もある。

筆者の大学院のプレゼンテーションの授業では、「自分の研究を他専攻の学生にも分かりやすく説明する」という課題を与えているのだが、何かある題材の序論・本論・結論というテンプレートで基礎項目を導入すると、序論にあまりに当たり前の項目を背景説明として取り上げて、なかなか本論に入れなくなってしまいう例が時々ある。いざ自分の題材で構成を考えると、見本にある背景の内容に気が取られて、本論との関係性には目が向かなくなることがあるのだ。だから、学生同士のコメントが重要になるのだが、内容についてのコメント交換に慣れていない学生も多い。

そこで、大学院生では、個別にチュートリアルを組み合わせ、概略を日本語

で説明させた上で、ストーリーを練るという作業を行っている。そして、主題とすべきこと、つまり本人でしか話せないことを抽出し、それに合わせて背景説明をどのレベルから始めたか適切なかを検討する。また、話の展開に飛躍がないか確認作業も行う。

同時に、言語レベルに合わせて、視覚資料（PPT）の構成を考える。原則として、PPTは言語表現を補う手段と考える。例えば、図・グラフ、動画のほか、引用など言語内容的に重い文、発音に問題のありそうな専門用語などだ。

こうした作業を行いながら、英語を添削していく。大学院クラスは社会人学生もおり、英語のレベルも多種多様なので、翻訳ソフトであろうが、代筆であろうが、まずは書かれたものが理解できるレベルに持っていく。翻訳ソフトで作成された文章をもう一度推敲することもある。ただし、その場合、学習者の抱える問題が何なのかを必ず指摘する。英文法・語彙に問題があるのか、それとも、日本語で考え出した文が整理できていないのか、学生の意図を確認したうえで程度修正して、本人が自分で対応できる余地を残しておく。

大変手間のかかる作業ではあるが、これをやるのとやらないのでは成果は大きく異なる。目的は、学生のできないところを探し出すのではなく、できる部分を指摘して、それをうまく生かせるようにすることである。

4. 身体的アウェアネス

英語で表現するためには、表現に関わる筋肉等のレディネスが前提となる。通常、英語学習で強調されるのは唇・舌・歯など調音器官で、日本語にない音の説明で、学習者にもある程度は馴染みがあるが、声のエネルギーを生み出す呼気、またそれを効果的に表出する仕組みについてはあまり意識していない場合が多い。

4.1 呼気—体幹・姿勢

日本語音は（特に学校教育の場では）減衰して、文末がはっきりしなくなることが多い。英語のように文末の語をはっきり発音しようと思うと、減衰する日本語発音の呼気エネルギーでは不十分だ。体幹がぶれて、腹斜筋を有効利用しないで英語で話すことが習慣になっている学生は多い。

英語で話す場合の重心はみぞおちと言われるが、人前で通る、つまり言いた

いことを伝えるためには、体幹を安定させて腹斜筋で横隔膜を有効に使う必要がある。結果、姿勢が整い、胸が広がって堂々と見える。全身がうつる鏡を使って、姿勢を意識するだけで十分意識できる。姿勢を整えて下腹を締めることを意識することが有効な場合もあるし、胸を広げて肩を落とすよう意識させることが有効な場合もある。体幹がしっかり保たれて姿勢が整うと、声帯を操作する筋肉も有効に使えるようになるので、日本語で話す場合でも声に張りが出る。

とにかく、呼吸や体幹を意識させる言葉をいくつか用意して、通常のリーディングの時間などでもある程度時間をかけてやらせると、できるようになるものだ。学習者の性格によっては個別指導も必要だろう。

4.2 調音器官

外国語として英語を話す場合、日本語に比べて唇や舌を大きく動かす必要がある。よって、唇や舌などの調音器官、またそれをコントロールする筋肉は念入りにトレーニングしないと発音スムーズに行えない。こうした小さな筋肉は個人差が大きいので、自主的なトレーニングが促せたらよいだろう。特に、外国語である以上、ゆっくり丁寧に発音する練習を習慣づけることが必要だろう。

例えば、自分の声を録音して聞き返すという手段もあるが、耳よりも口・顔の動きに注目させるのに、DVDは有効である。また、歌には呼吸や調音器官の高度のコントロールが必要なので、発音訓練としては有効だ。例えば、映画『レミゼラブル』は役者が実際に歌っているのを録音しているので、口の動きが鮮明で意識しやすい。例えば、英語の字幕を筆写しながら声に出してみるという練習方法もある。曲が予測できれば、歌詞をどのように曲に当てはめるか、つまり、言葉や言葉のリズムの予測を自然に身に付けることも可能だ。

調音器官を意識する際に重要なのは、個別の音が発音できても、周りの音との関係、また音の位置によって（文頭、文中、または文末）、必ずしも結果は同じでないということだ。単独の音韻を一つ一つ取り上げるより、キーワードの音から指導していくと受け入れられやすいと感じている。

この他、音韻については、詩や戯曲、または著名なスピーチの一節などを、自分なりに感情をこめて暗唱できるようにさせるというのも有効だろう。レベル的に扱いやすいものを選択してもいいが、レベルが高くてもしっかり

しているものを選択すれば、やりがいを感じるようである。

最後に、語末の子音と語頭の母音を連結させるリエゾンも、調音器官のトレーニングである。単語一語一語を几帳面に覚えてきた学生は、文章を読ませると一語一語切って発音する癖がついており、リエゾンと言う現象の理解はできていても実際にリエゾンして音読することができない。母音もいちいち切って発音するので、エネルギー効率も悪い。努力している割に結果が出ないということになる。耳で聞かせて繰り返させても、原稿を見た瞬間に戻ってしまうことが多い。なので、繰り返し実際に声に出させる必要がある。他の学生のいるところで一人だけ繰り返すというのは心理的にプレッシャーのかかる作業なので、間に一斉練習を挟んだり、しばらく時間を空けてから繰り返したりして、発音練習がプレッシャーにならない配慮も必要だ。

4.3 効果的な表出のために

調音器官で生成された音の認知には骨伝導が影響するので、実際に表出された音とは一致しない。録音した声を始めて聞いて愕然とする経験は誰もが持つものだ。この誤差は、骨格による場合もあるが、表情筋、顎や顎の位置によるものが大きい。

歌の場合、「音痴＝耳が悪い」と言われるが、問題は耳なのではなく、調音器官で作りに出された音（骨伝導で聞いている音）が、そのまま表出できていないことなのだ。その理由としては、口腔と気道との角度が保たれていない（顎または顎の位置が悪い）、唇周りの筋肉が音の表出を妨げている（唇周りの筋肉に対して呼気エネルギーのバランスが悪い）などがある。

歌の指導から学べることなのだが、まずは口角を上げることによって（頬筋を使うことによって）唇の干渉が抑えられ、さらに目を大きく開ける（上瞼の筋肉を使う）ことによって軟口蓋が上がって口腔が広がり表出音に明るさが出る。後者は特に文末の /i/や/u/などの母音を明瞭にするためには不可欠である。

発声で「頭声」という表現があるが、声の共鳴には口腔だけでなく副鼻腔、胸腔、腹腔、頭蓋骨、さらに言えば全身が関与する。話声は、歌声ほど繊細で力強いコントロールを要するものではないが、基礎的練習として歌を利用するのも効果的だ。この場合も、ただ、むやみやたらに歌うのではなく、個々の身体的特性を認識したうえで、英語の音の特徴が少しでも出せるような開口、唇や舌の動きを意識するように指導するとよいのではないだろうか。

5. 空間の Awareness

空間の Awareness とは、プレゼンテーションを行う空間だけでなく聞き手に対する意識も含める。

例えば、縦長の空間であれば縦方向に、横長の空間であれば横方向に、声の大きさだけでなく方向性も操作する必要がある。ただやみくもに声を張り上げるのではなく、わざと小さい声で特定の人間に話すことで内容を強調する手段もある。こうした配慮ができるようになるためには、かなりの馴れ（訓練）が必要だが、例えば、授業で行う基礎的な訓練として、戯曲の一節、特に感情の大きな起伏を含む一節が扱えるだろう。感情移入しやすいものを選択して、演じる、あるいは朗読するのだ。学生のパーソナリティによってはためらうことがあるかもしれないが、いくつか選択肢を与えて、一番じっくりくるものから練習させてもいいだろう。最終的には全くの別人格になりきれれば大成功だ。

6. 最後に

例えばピアノの学習ではツエルニー 30 番が中級と上級の境目になるが、ツエルニー 30 番ができなくてもある程度の曲は弾ける。だが、これをクリアしないことには豊かな表現はできない。何も考えなくてもクリアできる学習者がいる一方で、単調な機械的訓練（筋肉訓練）に辟易してピアノが嫌いになってしまう学習者は多い。「音が苦」になってしまう例だ。だから、ある程度曲が音楽的に演奏できるようになってからツエルニー 30 番を始めたらいいとする指導者もある。

大学での英語教育にも同じことが言えるのではないだろうか。筆者が学生時代、イギリスやアメリカの語学コースでは、従来ペーパー試験でクラス分け試験が行われ、日本人学生はその結果中上級クラスに振り分けられるものの、運用レベルはヨーロッパの初級クラスの学生にも匹敵しないことが多々あった。当時からすれば、現在の学生はずいぶん様変「一応、中高で英語は学んだ。だが、使えない、できない」という固定観念が相変わらずである。労力の大半は効率的な知識習得であり、実際にそれを表現して、その結果を楽しむところには至らず大学に進学するものが大半である。

まずは、表現を「体験」させ、その面白さを「体感」させたうえで、足りない言語表現を補い、勘違いを修正していく期間があってもいいのではないだろうか。大学教養科目としての英語教育はまさにその期間としては最適だろう。学生の成熟度を考えれば、題材は内容に重みのあるものが適切で、例えば、文学・戯曲は実践的ではないとして敬遠される傾向があるが、音韻に着目するなどアプローチの仕方によっては最適である。同様に、歌や映画などであっても、同様なことが言えるだろう。その道のプロが練り上げ、長年、または広く親しまれているものの持つエネルギーを味わいつつ、学生が自分なりの表現で意図を表現していける方策を見出したいと考える。